

第28回

ドイツ語の歌を歌う ～楽しく歌おう (5)～

学習のねらい

ドイツの芸術歌曲は、18世紀後半に起こり、19世紀にはドイツ音楽の重要な一分野となっています。今回はその中からシューベルトとヴェルナーが作曲した「野ばら」をドイツ語で歌っていきます。「野ばら」の歌詞は、ドイツ古典派の詩人で文学者であったゲーテによって作られたもので、荒れ野に咲いている小さな赤い野ばらを少年がを見つけ、かけよってそれを喜んで眺めたという内容です。



講師
馬淵明彦

ドイツ語の歌を歌う 呼吸法と発声

ドイツ語による歌は、イタリア語や日本語で歌っているときに比べて、子音が多く息が足りなくなったり、「und」「mit」などのように、子音のたびに歌う息が止まってしまったりすることが多いようです。歌う息を流しながら、その中で子音も発音するというのが目標ですがなかなか難しいです。1つの練習として、リップロールという方法をやってみましょう。

唇をブルブルとさせながら、「ブーブー。ブーブー」と声を出します。これは、息の流し方や顔の脱力練習になります。皆さんもやってみましょう。

「野ばら」はドイツ語で「Hidenröslein(ハイデンレースライン)」となります。ハイデンが野原の「野」レースラインが「ばら」のことです。レースラインの中にドイツ語などに見かける「o」に「·」(ウムラウト)がついた「ö」がありますが、これをオーウムラウトと言います。

Oの口の形「え」と発音するつもりで発声してください。そして「R」で始まる言葉を歌うときは、巻き舌にすることが多いですから「röslein」の「レ」の発音は舌をよく巻いて歌ってきましょう。

ドイツ語でシューベルトとヴェルナーの「野ばら」を歌う

両方の「野ばら」とも詩人ゲーテの詩に作曲された歌曲ですが、シューベルトのほうは4分の2拍子で軽快な感じがしますし、ヴェルナーのほうは8分の6拍子で、ゆったりとゆるる感じがします。この違いは個性ということになりますが、2人の作曲家がゲーテの詩から得た感情的なものや、言葉の響きの感じ方の違いがこのように異なった表現となって現れているとみることができます。

2人の作曲家がほぼ同時期に生きたこの時代は、ロマン派の初期で、詩と音楽との結びつき

が以前よりももっと強くなってきています。そこで詩をいかに音楽で表現するかということが個性であり、重要になってきたのです。

モーツァルトが作曲した歌曲「春への憧れ」を鑑賞する

世界の人々から親しまれているたくさんのドイツ歌曲の中から古典派モーツァルトの作品「春への憧れ」を聴いてみましょう。この曲は、モーツァルトが亡くなる年の1791年に作曲された愛らしい表情をもった歌曲です。この曲のメロディーは、モーツァルトが作曲したピアノ協奏曲第27番の3楽章から転用されています。歌詞の内容は、美しい5月、愛しい5月、木々の緑や小川のそばの小さなすみれの花が咲くのを待ち望んでいる心境を歌ったものです。

ワードファイル

- 歌曲……………歌詞とメロディーとピアノの伴奏とが一体となって密接な関係を保ちながら、深い情感を表現する歌のことです。
- シューベルト……………1797年ウィーン生まれ。ロマン派の作曲家。生涯に600曲を超える歌曲を残し、19世紀ロマン派の歌曲に多大な影響を与えました。ほかにも、多くの交響曲やピアノ曲などが、世界の人々に親しまれています。
- ヴェルナー……………1800年生まれ。音楽教師および合唱の指揮をしていた人で、作品には歌曲や合唱曲、ピアノ曲などがありますが、その中でもこの「野ばら」がよく知られた作品です。

楽曲豆知識

ドイツ語による芸術歌曲の「野ばら」は、ドイツ古典派の詩人であり、文学者でもあるヴォルフガング・フォン・ゲーテ(1749～1832)によって作詩されました。ゲーテは、『若きウエルテルの悩み』などの名作を残し、ドイツ文学のみならず音楽にも多大な影響を与えた文豪の1人です。ゲーテは、1770年にゼーゼンハイムの教会牧師の娘フリーデリーケ・ブリオンと知り合いになり、情熱的な恋に落ちっていますが、ゲーテが創作した「野ばら」は、フリーデリーケ・ブリオンに対する彼の愛を比喩的に描いているものであると言われています。